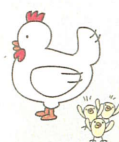
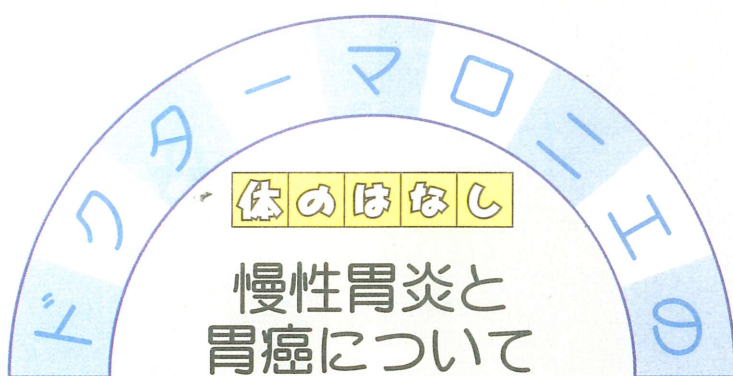


早期に見つかれば 胃カメラで完全に治療ができます



第68回



下都賀総合病院消化器科

江田 証先生

内視鏡検査（胃カメラ）やバリウムの検査にて「慢性胃炎（まんせいはいん）」や「萎縮性胃炎（いしゆくせいはいん）」と言われた方は多いと思います。しかし、これが一体どういう状態なのか、なかなか患者さん向けに書かれたものがありませんので、わかりやすくご説明させていただきますと思います。

「慢性胃炎」とは、胃の粘膜に白血球が集まって、常にじわじわとした慢性的な炎症を起こしている状態を言います。炎症が長い間続き胃粘膜の障害が進むと、胃酸を出す胃腺というものがひどく縮小して、胃の粘膜がうすくペラペラになってしまいます。すなわち、慢性胃炎が長く続いた結果として、胃の粘膜が萎縮した状態を「萎縮性胃炎」という訳です。

内視鏡で観察すると、正常の胃はきれいなピンク色をしています。しかし、慢性胃炎が長く続き、萎縮性胃炎になってくると、胃は色あせ（退色）、粘膜の下にある血管が透けて見えるようになって来ます。

最近までの研究で、この原因のほとんどがヘリコバクター・ピロリ菌という細菌によつて引き起こされていることが分かつて来ました。

五十歳以上の日本人は、大多数がこのピロリ菌に感染していますが、感染時期は、五歳未満の幼少期と言われています。幼少

期にピロリ菌に感染した胃は、常にじわじわとした炎症があるために、次第に痛んでゆき、三十歳位から萎縮性胃炎に進行します。このせいで、生まれた時はきれいなピンク色だった胃も、次第に粘膜が薄くなつて、色あせてしまうという訳です。さらに、萎縮が進行した胃には、三十歳後半から、大腸や小腸の粘膜に似た「腸の粘膜」がデコボコと生えて来ます。これを「腸上皮化生」と呼びます。この腸上皮化生粘膜を背景に、胃癌が発生すると言われています。

「慢性胃炎↓萎縮性胃炎↓腸上皮化生↓胃癌」という道すじの中で、慢性胃炎は「前癌病変」（癌になりやすい状態）として捉えられており、萎縮の進行度に応じて胃癌発生が高くなることが統計上わかっています。私自身も、腸上皮化生の段階の粘膜にさまざまな遺伝子異常が存在することをDNAチップを用いて見いだし、米国消化器病学会で発表して参りました。

したがって、慢性胃炎や腸上皮化生がひどくなつた方は胃癌が出てくる危険性が高いため、早期の胃癌を診断する目を持った消化器専門医師による、年一回の胃カメラを欠かすべきではありません。胃癌が出来ても、早期に見つかればお腹を切らなくても胃カメラで完全に治療が出来るため、なるべく早く発見して完治することが大切なので。肉親が胃癌で亡くなつた方など、ご心配な方は、外来でご相談ください。予防・早期発見に努め、この愛すべき故郷から、進行胃癌で苦しまれる方を一人でも減らして行きましょう。

冬期の交通安全事故防止

「冬の交通事故防止対策」は万全ですか？

暖冬と言われていますが、冬期は「路面凍結」や「降霜」などによるスリップ事故が予想されます。

次のような自動車運転への悪影響が見られますので、注意しましょう。

●フロントガラス、ドアミラーへの降霜による視界不良

事故防止のポイント

栃木警察署

- ◆余裕をもった出勤、ゆとりある運転
- ◆前照灯の早め点灯（場合によっては出勤時もの励行）
- ◆急加速、急減速、急ハンドルなど「急」のつく運転を避ける
- ◆冬用タイヤの着用